は沙汰の限りであります、その配偶者の死亡、又は法律を以て離婚の正當なるを主張し得べき場合には、離婚再婚決して不可とするではありません。否、却つて之を奬勵すべきものだと、是亦道理ある言葉であります。

固より再婚の可否に就ては、私は男子についても女子と同樣なる意見を持つて居るものでありますが、之を人倫より見たならば、再婚は高潔なる愛情を殺ぐものであります。所謂戀愛の神聖を汚すものであります。例へば男子の戰場にありて、將斃れ卒死し、刀折れ矢盡きて、降參を軍門に乞ふものが、必ずしも現代武士の耻辱とするに足らないとしても之を以て日本武士の面目とすることの出來ないやうなものであります。されば現代の日本婦人は、如何に節操を持つべきかと云ふに、それは申すまでもなく、「貞女兩夫に見へず」といふ高潔なる心情を保ちてその如何に逆境に遭ひましても、再婚を拒み、高潔なる生活を希ふべきは勿論であります。

以上の再婚否認說は社會の各婦人に申すばかりでなく、世の男子に對しても、亦之を希ふものでありますが、未だ社會の不完全にして、人事の不如意なる、是非この樣な嚴肅說を、一般の婦人方に强ふることは出來ません、その生ける夫に對して、至誠の情に缺くることなく、その死せる夫に對して追善供養の赤心を了るものは、(凡そ一ケ年を以て限度とします)。再婚が必ずしも不名譽とするものではありません、却つて世の如何はしき獨心者流に優ること遠しとするものであります。

故に私は、その素養深き高潔なる婦人の再婚を拒まるを、人生の大名譽とすると共に、世の常の婦人に對して、正當なる再婚を遂げらるゝを、今代の人道として寧ろ希望するものであります。

保育叢話

光藤夫人

十年間中子供を育てるにつきて最も痛心せし失敗談子供をして、病氣にかゝらして心配した事もありますし、下女共に預けて置て我怪をさせられて

心配した事も一度や二度では御座いません、殊に子供がハイハイし始める頃からの危さと申したら、子を育てらるゝ人の誰れもが御經驗なさる所で御座いませう。緣側からコロガリ落ちて頭を打つ樣な事は度々で、少し目を離しますと、度膽を拔かれる程驚く事が度々あります、之を防ぎますには、負ぶも抱子も方法はありますけれど、活動したい子供の自由を奪ひて、之を背にくゝり付けるも、よろしくあるまいと思ひます、只私は子供室及び運動場の設備が肝要だと存じます。私はかつて京大學總長の菊池男爵の御邸を伺ひまして奇石や珍木を植ゑ込んでありますのは、只應接室の見晴らしよき所と、塀に沿ひました二間程の長さの間で、其の中央の廣い〳〵場所は皆芝生で子供が自由に轉がつても、起きても、鬼ゴッコをしても、何の遮るものも、ないのを見まして、いとど羨しう存じました、私も少し富有の身となりましたならば、早くかくして、子供の室も設けたいものと思ひましたが、若し、幸にして富有の身となる事が出來る頃には、モー子供は生ひ立つて、大人になつて仕舞ふと思ひますと、實に人生意の如くならざるもの十に八九の古人の言葉を思ひ出さずには居られませんでした。男爵は御子寶でしかも其お子樣を敎養されるのに用意が周到であるのに感じました。

マー並々の家では大人の室も、子供の室も皆一緒で御座いますから、子供に取つては大變な不幸で御座います、叱られなくつても濟む時にも、大人の室ではつい其處にある本をいぢつたり、破つたり、道具を破したりしまして、餘計な小言を頂くのであります。且つ危險が多いのであります。

私はかつて滿一年になる幼兒を背にして、片付をいたし、モー片付も濟みましたから、ソロソロおろして遊ばせやうと、負付の紐を取るはづみに、勢するどく、子供を眞逆さまに落しました、不幸の重なりたるものか、否全く、不注意のいたす所で、其の落ちた所には、火鉢が二つ並んで居りました、其の火鉢の黑檀の堅い緣で、したゝか顏を打ちました、其の泣き聲の遲いのは、たしかに打撲の强かつたに相違ないと、ビックリ仰天抱き上

げて見ますと案の定鼻の左側の頬に接近せる凹んだ所から出血が甚しく、顔は血を以て彩られてあります、ア、此の時の驚と、悲しみと、口惜しさは、いかゞで御座ましいたらう、湧く樣な涙が押して來る樣で、我身の不注意不甲斐なさが、しみじみ恨めしく、愛子に詫ぶる心の中、何とも譬へやうがありませんでした。

早速、負ぶして、醫者の許に駈けつけました、幸醫者も在宅で御座いましいが、朝の事ではあり、診察室の準備も出來て居ないので、書生は石炭をストーブに入れるやら何や角と、時間を費さるゝ時の待遠さ、一時千秋とは實に此の時の心持で御座いませう。愛兒の顏をのぞいては、熱い熱い玉のやうな涙が溢れる、許してよ、愛兒、許してよとの、痛切なる心の響が愛兒の心に通じてか、子供はスヤスヤと眠り出しました、見る目がつらひので眠を外にそらせますと、空は一天かきくもりて、霰さへ、ザー〳〵と降つて參りましたが、私には其の寒さも何にも思はれませんでした。

三十分も待たされて、シャクに障つたから、外な醫者にとヂレ〳〵して居ります時醫者はユックリと出て來られました、創を調られましたが、鼻の側六分計り切れて居りました、綺麗に洗ふて、縫ふので御座います悲、何分溝で縫ひ憎い、子供は大聲上げて泣き叫びます、醫者は縫い憎いとコボシます、書生はオヅ〳〵して居ります、私は只モー悲しみに心も亂れて見る勇氣はありませんが、矢張見ずには居られません、見ると止め度もなく落つるは袖の涙で御座います、十五分もかゝりまして、やつと手術が終へましたから、宅に歸りましたが愛子はつかれ切つた樣によく眠りました。

マーお守子もりが落す事か、殆んど全身の愛は、此子に、濺がれてある母親が何とした粗忽か不注意か、我子を落すさへあるに、折惡しく大怪我をさせるとは、何といふ不甲斐ない親であらう、どうした、不つゞかな母であらうと、殆んど形容の出來ない樣な、嫌な感じに胸はかきむしられる樣主人も夕方歸りまして、下女から聞き取り驚きあきれるばかり、私は合す顏さへない樣な氣持がいたして、殆んど苦痛の絶頂とでも申すので御座

いましたらう。

醫者の言葉で二三年すれば創の跡もなくなるでしようとの事で御座いましたが、丁度一年後の今日、大方分らなくなりました。毎日〳〵其の創を見ましては、よい戒めにはなりましたが、尤も苦痛な戒めで御座いました。

女に剛德養成の大切なる事

昔時スパルタの隆盛なりし時の女はいかゞで御座いませう、歴史で皆知つて居らるゝ通り、我が愛兒の戰場にのぞむ時、餞別の言葉はいかに、門邊に愛兒を送りて、涙を一滴落す所でなく兒よお國の爲めに奮鬪せよ、敵に後を見する如き卑怯の振舞があつてはなりません、若し運惡く敵を滅する事が出來ないならば、刀折れ矢盡きたる後、身を原野に晒せ、敗戰の不名譽を擔ふて、再び天日を仰ぐなとは、せん弱なる母親の、我が兒に對する言葉でありました。

佛帝ナ翁が歐州諸强國を討ち平げて、威を振ひました當時、先づ征せんとする國の、女子教育の程度を調査したとか、幼時からよく聞いた事でありますが、實に一國の强弱は婦人の力の預りて大なる事が分るではありませんが。

如何なる英雄でも、剛傑でも、皆この女子の體内に宿つて、其の教化を受けぬものはないのであります。其の母にして身體は薄弱で精神が柔弱でありましたならば、どうして、剛毅な勇士を生育せしめる事が出來ませうか、ペルシヤが一時隆盛を極めましたのも、ナポレオレの成功しましたのも偶然ではありません。

本邦でも歴史的に、之を研究しましたならば、必ずそのしかるべき理由の虚言ならざる事が證明されるのでありませうが、私の今こゝにのべたいと思ひます事に余り遠かりますから、これは他日に讓りまして、只現今の世、女子が如何になりつゝあるかをのべて未來の女子否母となるべき幼女の教養上の參考にしたいのであります。

私は素より井底の蛙でありまして、廣い世間に

通ずる事は出來惡いのでありますが、それでも時時上流の貴婦人とか、下流のドン底の車夫の妻とかまで、よく口をきゝまして、いつも色々な學問をするのが好で、時間を節約しましては、出來得る限りあらゆる方面の方を極簡單に訪問するのであります。

狹い私の此の實驗から、割り出して、其の要領を申上げましたならば、いづれの社會を通じても、皆女子に剛德の缺乏を見出す事が多いのであります。

極下等な、殆んど教育とては受けない、生れながらの野育ちの女は身體は割合に強健でしかも力量は、男子をしのぐといふ樣なのがありまして、雪の降る寒空に跣足で、洗濯でも、何でもドシ〳〵やる、一寸見ましたならば、マー強い事と奧樣方は感心遊ばすのがよくありますが、この強いといふのはホントに身心を鍛練して、完全な教育を受けた結果ではないので、只幼少より境遇上止むなく、常に貧窮を訴ふるの余り、余義なくされた結果で、只手足が其の寒氣に堪える丈で、強いといへば強いのですが、只不完全な、身體の鍛練の結果の現はれたもので、教育上價値あるものとは思はれません。なぜならば、かゝる女子は雪には堪え得る事が出來ましても、心の修養など殆んど皆無で、何も事ない時は、それでも、すみますが、何か一寸境遇に變化があるとか、少し面倒な仕事でも、命じて心を用ひしめ樣といたしますと、一向役に立ちません、少しの難事に出逢ひましても、彼等は此を理屈的に判斷をして、其の難儀をしのぐ事をつとめ樣とはしないで、只徒らに、ア、夢見が惡かつた、何か吃度身に災難でも來るのであらうか、父を失ふのであらうかなどと。あられもない心配をして、その余りに身體までも痛めるといふ言はゞ、禽獸に近い役に立たない、女子であるのが多いので之は眞の剛德でも何でもないのであります。

次に上流中流に人となられし女子達は、ドーモ身體が柔弱な風がありまして、所謂荒い風にも強い雨にも堪えにくいといふ風で只モーやさしいのを主といたして、何事にも女らしかれ、即ちやさし

かれ、華奢なれと敎養するの結果、身體は柔弱になります、柔弱なる身體には、又柔弱なる精神が宿りまして、心身共に柔弱に流れ、少ない人數の家庭でも、下女を使はないと用が足りない、不經濟でも、何でも仕方がない身體には變へられない、雪の日に米を磨げば、ヒビが切れる洗濯をしますれば、霜燒が出來る、手が太る、お三見た樣になる見つともない、人中に出られないなどゝ徒な心配をして、少しも役に立たないといふ風が多いかと思はれます。

かゝる鍛練も何もいらない、只やさしかれ、女子らしかれと希ふ變則なる敎育の結果、種々な實がなつた實例が澤山ありますがこゝに尤も變則な發育を遂げた婦人があります。

●實例●　中流の生活をして、何不自由なく、暮して居る夫婦の中に、男兒は三人もありましたが、女子がほしやと思ひ煩ふ折も折、掌中の珠と愛せらるゝ、女子が生れて來ました、兩親の喜びはいはずもがな、親類知己皆其の幸多きを悅びました。

素より中流の生活の何につけ、一人娘の事として蝶よ花よと愛でいつくしみ、重いもの一つ手に持つ事もなく、つたかづらの樣に、なよなよと生ひ立ちましたが、其の心の弱い事、一寸した出來事で、夜の目が眠られぬとい、ふ騷ぎ、私共のスレッカラしはマーあんな事が氣にかゝると、お可笑いと、いつて笑つて居りましても御本人は至極眞面に一生懸命心配して食事もろくろく出來ないさわぎ、余程感情的で同情の念は深いのですが、身心の柔弱なる事、難事に堪えるは愚か、平凡な事でも少しも我慢が出來ないのであります。

こんな風でありますから、妙齡の頃から、緣談もありましたが、アンコは姑があるから駄目、コチラは食客があつて厄介が多い、アンコは人數が多いから氣兼が多い、コチラは遠方へ勤めらるゝから故郷をはなれる心配がある、マー何の彼のと一寸した事を氣にかけて、親御も亦一日でも餘計に手許にをきたいと希ひ、トートー今日初老の域に達して、人生の終りも近づいて

も矢張心細くオールドミスとはなりはて、心をまぎらす由にもと、毎日カラ〳〵下駄で、學校に幼兒を教へて居られます。

學校へでも出て先生でもするといふのは、余程しつかりした人でなければ、六ケしい樣でお座いますが、先生にも色々ありまして、ずいぶん柔弱驚くに堪える樣の人もあるので御座ます。

かゝる變則の實例は余り多くは見聞いたしませんが、之に似寄りた事はよくあるので御座います。

つまり母親已に剛德に乏し、我が子を教養するのに己に此の鍛錬主義に乏し、從つて剛德の芽は發育を遂ぐる事が出來ません、親讓りの柔弱な風は又其の女兒の全身を支配して、正しい人道を踏ませる事が出來ませんでした。

元祿時代世は太平の夢にねむりて、士氣が柔弱となりました結果はいかゞで御座いませう。文武日に月に開け行く昭代の今日內憂外患のない事はありませんが、一般にドーヤラ秩序が整ひまして太平を謳歌するの時、再び元祿時代の柔弱の風を釀しはいたしますまいか。

柔よく剛を制すとは誰れも申す事で、御座いますが、今少し柔の德を養成すると同時に適當なる方法によりまして、柔德を害せざる範圍に於て、剛德を養ひ、平素は兎も角一朝變事に遭遇して順境より逆境に陷りました樣な場合にも、餘りうろたへて不覺の涙の出ない樣に、餘り愚痴ばかりこぼさぬ樣に平素から躾しておく事が大切であります

圓滿なりし家庭の、俄かに父を失ひて悲觀し、落魄して家名をおとすとか、いつぞや新紙の三面記事の材料となりし某博士の令妹が、操を破りて、朝に吳客を送りて、夕べに越の客を迎ふるといふ樣な、淺ましい賤業に身を落して、一身一家を誤りし樣な、或は慈母に離れ繼母のよそ〳〵しい取扱を受ける樣になると、俄に世を悲觀して、一身をつめたきレールの上に殺すとか、其の他日々起る事件のいかに多きかは、はかり知る事が出來ませんが、此等逆境に身を入れました不幸な人でも、若し平素からよく當局者が剛德を養成しておきましたならば、或は其の災も少くして濟むかも知れない場合が澤山あるのであらうと思ひます

よしかゝる逆境に逢はないにしましても、之れからの世は、生存競爭が日一日と烈しくなるのでありますから、女子が柔弱でありましたならば、決して其の競爭に打かちて好い結果を納め、健全な家庭を作りて、其處に身心健全な子女を養育するといふ事は六ケしいのでありますから、極幼少な頃から母親が充分な注意を以て、殊に女子には優にやさしい其の中に犯す事の出來ない剛德を養ひおく事が肝要かと存じます。

要するに下流の女子の剛德の缺乏は心の教育の不足にあるので、上流の女子の剛德の缺乏は身體の鍛錬の足りない傾向があると存じます。無論上流の女子でも、心の修養は立派であるとは申されませんが、大要かく區別する事が出來ると思ひます身心は密接な關係のあるもので、身體の影響は心に心の影響は身體に及ぶのでありますから、兩方をよく適當にねり上げなければ、完全な剛德を備へた婦人とはなれないのであります。

中村敬宇先生の母

記者

文學博士中村敬宇先生の名は西國立志篇の譯者としてのみ今の青年界に殘つて居るけれども其眞摯にして溫厚なりし德行に至りては夙に學者界に敬重せられて同人社なる先生の學塾の江戸川河畔に盛りし頃は一部の學生から神の如く尊敬仰慕せられたものであつた。今の女子高等師範學校も暫くは校長として先生を戴きしことがある。斯く一世の推重を受けし先生も明治の初年鎖港攘夷の說喧しく或は幕府の專横を憤るもの或は當局の優柔を慨するものなど續出して學者志士のそこ此處に刺客の手に斃るゝもの尠らざりし頃には危くも一刺客の狙ふ所となつてすんでの事に一命を落すところであつた。然るに先生の母堂は從容として家人の狼狽を意とせず、當の刺客と押問答をして遂に之を說伏せて仕舞つた爲めに先生は幸に命を拾はれたさうである。當時の模樣が先頃或新聞に出て居つたのを見ると其母堂の尋常一樣の婦人で